

学校経営計画

狛江市立緑野小学校 校長 亀田親子

* ◎・下線は重点

1 学校の教育目標

児童の知性、感性、徳性や体力を伸ばし、社会人として自立し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指し、次の教育目標を設定する。

- ◎よく考える子（自らの考えをもち表現し、課題を解決する力）
- 美しさを感じる子（豊かな感性をもち、他者と共感する力）
- 共に生きる子（自他を大切にし、他者と協働する力）
- 健康で頑張る子（心身を健全に保ち、最後までやり抜く力）

2 目指す学校像

- 児童一人一人が笑顔で学び、生き生きと生活できる学校
- 教職員がやりがいをもち、職務に対する達成感を得られる学校
- 保護者・地域が教育活動を信頼し、支えていきたいと思う学校

3 学校経営の基本的な方針

「学校の主役は子供、学校教育の要は教職員、支えてくださるのは保護者・地域」

「チーム学校・チーム緑野」として組織的に「みんなでみんなを育てていく」

(1) 危機管理を徹底した学校経営

- ・児童が自らの命を守る実践力の育成（教職員一人一人の危機管理意識の向上と持続）
- ・教職員のサービス事故ゼロ宣言
- ・新型コロナウイルス感染拡大防止対策の質の維持（経験値を活かす）
- ・安心・安全を徹底した綿密な授業計画（週案への記入・本時の安全のポイントの指導等）
- ・安全な環境作り（整理整頓された教室、教材室、運動場、体育倉庫等）
- ・安心・安全な給食の提供（全ての教員が食物アレルギー対応を理解）

(2) カリキュラム・マネジメントの視点に基づいた学校経営

- ・協働的な学びと個別最適な学びの実現（令和の日本型学校教育）
- ・狛江の教育21研究協力校として、「生命と人格・人権を尊重する態度の育成」を目標に研究に取り組む。（令和4・5年度）
- ・教科横断的な視点、教育課程のPDCAサイクルの確立、地域等の物的・人的資源の活用
- ・「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善
- ・校内研究や小教研等で作成、実践した成果を生かしながら、よりよいものにしていく。

・ICT教育のさらなる推進

(3) 学年団・学級団（えのき・ふたば）を生かした学校経営

- ・学年団（3～4人）の教員皆で学年児童全員を育てていく意識もつ。学級担任であるとともに学年担任であるという意識を常にもち学年同一歩調で進める。

- ・えのき、ふたばの教員が協力して、学級や教室の児童全員を育てていく意識をもつ。
- ・学年の状況に応じて、交換授業や一部教科担任制を導入する。(組織的児童理解による様々な問題の未然防止や早期解決・授業の質の向上・OJT の推進・教材研究の時間軽減・帯の時間割を活用)
- ・特別支援学級があることや特別支援教室拠点校であることを強みとし、特別支援教育を充実させる。(校内委員会の活性化)
- ・特別の教科道徳は、帯時間に設定し交換授業で授業の質の向上と教材研究の時間軽減を図る。(働き方改革にも関連)

(4) 地域との連携を推進する学校経営

- ・コミュニティ・スクールとして、地域、保護者との連携や学校間連携を充実させる。
- (5) 「働き方改革」を推進する学校経営
- ・校務分掌等、現状で維持すべきものと、改革できるものを見極めながら、アイデアを出し合い、働き方改革を推進
 - ・働き方改革は、教職員自身のためでもあるが、学校教育の質の向上のためである。
 - ・学校経営本部を活性化

*研究指定等

令和4年度 オリンピック・パラリンピック教育レガシーアワード校(障害者理解)

令和4・5年度 狛江の教育21研究協力校

青少年赤十字加盟校

4 本校の重点目標と具体的な取組

	中期経営目標	短期経営目標	具体的方策(例)
確かな学力の定着	基本的な学力を確実に身に付けさせるとともに、思考力・判断力・表現力を身に付け、学びに向かう力・人間性を育成する。	指導方法を工夫・改善し、日々の授業を充実させる	良好な学級集団づくりを基盤として、基本的な学習規律の形成を図るとともに、協働的な授業を展開しながら、個の実態応じた個別最適な学習を行う。
			狛江の教育21研究協力校初年度として、国語科と中心として、学習や生活の基盤となる言語能力の育成を図る。
			算数では、習熟度別少人数指導を実施する。算数習熟度別少人数委員会を中心に、計画的な指導及び評価を行う。
			道徳では、「考え・議論する道徳」を目指し、年間35時間の指導を計画的に行う。学年担任制を活用し学年内で交換授業を実施し、授業の質の向上を図る。
			思考力・判断力・表現力の育成を目指し、ICT 機器や思考ツール等を効果的に活用する。

			言語能力（思考力・表現力）を一層充実させる。特に、ESD カレンダーを基に教科横断的な視点で、主体的・対話的で深い学びを目指す。
			外国語科や外国語活動等を通して、児童のコミュニケーション能力の向上を図る。
		学習の習慣化を図る。	（10分×学年）を目標として、復習を中心とした家庭での学習時間を推奨する。タブレット端末及びドリル等を効果的に活用していく。
		学習規律を統一する。	学習規律を統一することで、どの教員が授業を行っても指導し易い環境を作り、授業時間の確保と質の向上につなげる。
体力の向上	心身を健全に保ち、最後までやり抜く力を育成する。	健康教育を通して、たくましい心と体を育てる。	児童自らが健康的な生活を送ろうとする態度を育てる。（体育指導・体育的行事の工夫、保健指導・学習、食育等を通して）
			縄跳びや持久走月間の取組等、年間を通して運動に取り組む機会を設定し、自己の目標に向け楽しみながら体力の向上を図る。
			保護者のサポートや参観を計画的・意図的に行い、児童の体力・健康についての意識を高める。
			アスリート派遣等を活用し、体力向上への意識を高める。（豊かなスポーツライフ充実事業）
豊かな心の育成	好ましい人間関係の育成を図り、豊かな感性や社会性を育てる。	学年団が学年担任としての意識をもち、全学年の児童にかかわり指導する。	学年内での交換授業や一部教科担任制を取り入れながら、全学年の児童理解を図る。
		教師と児童との触れ合いを大切にする。	登校時の門や朝の教室での出迎えを通して、児童の心の安定を図り、1日をスタートさせる。 学齢に応じた、教師・児童との望ましい人間関係を構築する。
		規範意識を育てる。	生活指導の重点項目とする。「緑野小のきまり」を共通理解し、統一した指導及び徹底を図る。
		いじめ未然防止対策の取組	学校いじめ防止基本方針に基づき、いじめ未然防止に関わる取組を年間通して、意図的かつ継続的に実施する。また、地域人材も積極的に活用する。
		特別な教育的ニーズを必要とする児童や不登校傾向にある児童への支援を図る。	学年団では、気になる児童の情報を日常的に共有する。校内委員会では、全校で児童理解を図るとともに、教育相談員、SC 等の関係機関と連携して、問題の解決に組織的に取り組む。 不登校傾向児童への支援を行う。当該学級担任は定期的に連絡・声かけを行い、帰属意識をもたせる。また「学校と家庭の連携事業」等を効果的に活用し、未然防止に努める。

			特別支援教室(ふたば学級)と連携し、児童個々の実態に応じた指導方法について情報を共有し、落ち着いて学級で過ごす環境を整える。
		WEB-QU の効果的な活用	集団としての質を高めると共に、学力の定着状況に応じた指導を工夫することにより、一人一人の能力の伸長を図る。また、結果を個人面談等で保護者との連携にも活用していく。
			学年団で共通理解し、課題のある児童には学年体制で指導・支援を行う。
特色ある学校づくり	緑野小学校の特色をいかした教育活動を展開する。	学校図書館の積極的な活用を図る。	<読書センターとして>質の高い読書習慣を身に付けさせる。(読書旬間の設定・本の森の活用・緑野文庫の完読を目指す等)
			<学習情報センターとして>学校図書館年間活用計画を基に、各教科領域の探究的な学習を充実させる。
		オリンピック・パラリンピック教育レガシーアワード校としての取組を実施する。	障がい者理解教育や国際理解を視点とした取組を、総合的な学習の時間を中心に実践していく。また、えのき学級、調布特別支援学校、副籍児童等との交流を継続・充実させる。
		地域社会の一員としての自覚を育む。	ブラスバンドの演奏活動を通じて、児童の達成感・自己有用感を味わわせると共に、地域に貢献する意識を高めさせる。
			地域の障がい者施設との交流を通して、地域の大切にする心を育む。
清掃活動や、近隣保育園・幼稚園等との交流を充実することにより、地域貢献への意識を高めさせる。			
地域とともにある学校づくり	保護者や地域に信頼され、積極的に関わることができる学校づくりを進める。	保護者・地域と、共に児童を育てていく。	土曜日授業を活用し、保護者・地域と連携した授業・行事等を企画・実施する。また、地域コーディネーターを活用し地域人材を招聘した出前授業を行ったり、地域の行事に参加したりして学校との信頼関係を築く。
		一中ゾーンのコミュニティ・スクールとして小中連携を推進する。(四中ゾーンにも所属)	一中・一小と連携を取りながら、交流活動を通してコミュニティ・スクールとしての取組を推進していく。四中ゾーンにも所属し、四中・五小との連携も推進する。
		幼保小中の連携を密にする。(小1プロブレム、中1ギャップへの対応、キャリア教育)	小学校間、小中学校間の連絡を密にする。また、学校訪問、幼保の学校訪問等で、幼児・児童、児童・生徒間交流を行うことを通して、安心感やあこがれをもたせ、円滑な接続を目指す。

学校運営・その他	児童の安全確保に向けた支援体制の構築と安全教育の推進	危険の予測や回避に関する実践的な能力や態度を形成する指導	生活指導部を中心に、危険の予測回避の場面を想定した避難訓練を計画的に実施する。教職員や児童に予告しない訓練場面を設定することで、児童自らが自分の命を守る行動をとることができる力を身に付けさせる。 安全教育の年間指導計画に基づき、日常的・定期的・特設の時間に指導を行う。
		自然災害発生時における避難所開設に向けた体制を整える。	避難所運営協議会と連携を図り、自然災害時に円滑に避難所開設を行う。学校開設時においては、児童の安全を確保する。
		事件・事故の際に、児童の安心・安全を確保する手段を周知する。	教職員に危機管理マニュアルを周知するとともにミマールメのシステムやホームページを活用し、緊急時の連絡体制を整える。
	働き方改革の推進⑫	分掌事務の効率化及び適正管理	一人一人が、日々「効率と成果」を意識しながら業務を行っていく。校務分掌の主任は、進行管理を行い、適正かつ効率的に校務を推進させる。
		効果的な教材研究等の推進	学年内での交換授業・一部教科担任制を通して、教員の教材研究にかかる時間を削減する。
	教員として、常に研究と修養に努め、資質向上を目指す。(OJT推進)	日常の教育活動での無理のないOJTの推進	学年内での交換授業・一部教科担任制を通して、若手教員がベテラン教員の指導技術を学ぶ。 2~3回同じ授業を実践することで、自らの授業においてPDCAを行い、授業改善を図る。
		自己のキャリアを見つめ、伸ばす。OFF-JTの推進	管理職との指導・助言を通して、自己啓発を図る。各種研修会に意図的・計画的に参加させ、指導力を身に付けさせる。
		若手教員育成の育成	主幹教諭・主任教諭は、職層に応じた人材育成の視点を持ち、若手教員を育成する。 主幹教諭・主任教諭を中心に、研修会を企画し和若手教員の資質向上を目指す。
	サービス事故の根絶	年3回のサービス防止研修やサービス事故防止月間だけでなく、年間を通じてサービス事故防止研修を実施する。	日常的にサービス事故処分事例を説明したり、会話の中でサービスに関する話題を出したりしながら、サービス事故防止研修を継続し危機管理意識を高める。 長期休業前には、ロングのサービス事故防止研修を行う。これらの取組を通し、サービス事故を絶対に起こさないという意識を培う。